The Mysteries of Udolpho と *The Italian* における結婚、財産、恋愛

── *Persuasion* と比較して ──

神 徳 敦 子

◇序◇

Jane Austen の *Northanger Abbey* (1818) が Gothic romance のしくみを巧みに利用した commedy of manners の作品であることは一応定説と言ってよいだろう。Ann Radcliffe の *The Mysteries of Udolpho* (1794) (以下 *Udolpho* と略)を熱狂的に好む Catherine Morland は Northanger Abbey でゴシック的恐怖を味わい、それが愚かな思いこみによる滑稽な勘違いであることを悟って成長する。Catherine の勘違いをたしなめる Henry Tilney の "Remembering the country and the age in which we live. Remember that we are English, that we are Christians." (*Northanger Abbey*, p.172,[1]) という台詞と、'The visions of romance were over.'(同 p.173) という地の文を引用して Joseph Wiesenfarth は、この瞬間に、'mannered social order' が Gothic 的恐怖を時代遅れにし、'Gothic illusion' が死んで中産階級の reality が目覚めたと意義づけ、commedy of manners が Gothic romance を終焉に追い込んだとしている[2]。romance のパロディから小説が生まれた経緯を想起して Jane Austen が女セルバンティスと言われ、Gothic が romance であり神話であるならば Austen の作品は realism の小説であるとされる由縁である。しかし Radcliffe の作品の最大の特徴である「啓蒙的ゴシック」「説明される超自然」といった性質は、Radcliffe の作品には Gothic romance と共に、その相対立する概念である合理的精神も同居する構造であることを示している。全ての Gothic 的恐怖と超自然現象に合理的説明を加えて解決する *Udolpho* や *The Italian* (1796) の手法はまさに *Northanger Abbey* のとった手法であり、その合理的精神は romance ではなく realism の方を真実と信じる精神である。実際、理性を働かせて迷信や不安・恐怖を打ち消そうとする *Udolpho* の Emily や、迷信を軽蔑し思慮を用いようとする *The Italian* の Vivaldi の姿は繰り返し描かれる。Radcliffe の作品のこのような一面は、Austen の小説世界と対照的に捉えられるというよりはむしろ類似していると言える。

Radcliffe と Austen はこれまで様々な視点から比較されてきたが、本論では両作家のヒロインたちの結婚の背景・展開の類似や相違に注目し、それぞれの作品が Gothic romance と realism 小説という対照的な表現形態を呈している意義について考察し、Radcliffe の作品の性質を明らかにしたい。まず当時の女性の結婚の背景については、伝統的な経済結婚の制度に個人の恋愛感情が侵入してきたことを挙げねばならない。R.Miles は、個人主義の浸透してきた 18 世紀においてお互いの尊敬と平等の意識に基づく恋愛結婚は、政治的には liberal で、Protentant (Dissenting) で morality と propriety について厳しい考え方を持つ中産階級の価値観と結びついていたと指摘し、この恋愛結婚と伝統的封建的な経済結婚との緊張関係を Radcliffe の作品の背景の 1 つと見なしている (Miles[3])。Austen の時代になると、家父長が家系の都合のために子供の結婚相手を選ぶ経済結婚はすたれ始めていたとされるが[4]、それでも経済問題が女性の結婚にとってその後の人生を決める大問題であったことには変わりない。一つにはこのような土壌が、財産と愛情の両方を重視して結婚相手を選ぶ Austen のヒロインたちを生み、また Radcliffe の場合にもたとえば *The Italian* のような、Ellena と Vivaldi の恋愛結婚が財産の不釣合を理由に阻まれるといったプロットを生む。

このような背景に加え、Radcliffe と Austen の作品に見られる結婚観を比較する際に重要となるのは、女性の持つ 'propriety' と 'sensibility' の概念である。Mary Poovey は *The Proper Lady and the Woman Writer* で、18世紀に貴族の土地と新興中産階級の資本が結婚によって結びつけられてゆく中、女性の結婚に経済目的が重視され、家父長制・ブルジョワ資本主義等の社会秩序を守るために女性には 'propriety' の価値が要求されて自分の願望を直接表現できなかったという社会状況を指摘している。その上で、女性作家、及びそのヒロイン、'proper lady' たちにとって自己表現とは、願望は慎み深さ (modesty) に

よって表明され、自己実現は従順な忍耐強さ (meekness) によって達成され、romantic loveは自己制御を身につけた若者に与えられるといった、'indirection' (間接・迂回表現) や 'accomodation'(順応) といった逆説的なものであったと論じている。Poovey によれば、Radcliffe の *Udolpho* は、女性が経済結婚の道具にされる恐怖を空想のうちに描いたものであり、また 'propriety' の抱える問題に挑戦しなかったように見える保守的な Austen の場合においても、若い女性の成長・成熟を扱う時、女性の願望と 'propriety' の複雑な関係に関わらないですますことはできなかった[5]。'Poovey' はまた 'Ideology and *The Mysteries of Udolpho*' において、当時独身女性は純潔 (sexual purity) と経済力 (贈与される財産) を利用して結婚することによって social identity を確立したとし、18世紀に流行した 'sensibility' あるいは 'sentimentalism' のもつイデオロギーの男女それぞれに対する働き方について考察し、女性が 'sensibility' の価値を守って結婚し家庭にあることは女性を抑制すると同時に多少でも地位と行動の場を与えるものでもあった、としている[6]。

この論文では Radcliffe の *Udolpho*、*The Italian*、Austen の *Persuasion* (1818) を取り上げる。Austen の作品のうち *Persuasion* を選ぶのは、ヒロイン Anne Elliot が分別と女性らしい持続する愛情の両方を兼ね備え、自己表現の控えめな「説き伏せられる」性格を持っていること、また小説の冒頭で Anne が Frederick Wentworth との婚約を諦め、分別をふまえた上で romance を身につけるという、他の Austen の作品にはない設定を持っていることが、女性の結婚、財産、propriety、恋愛、感情と分別、自己抑制と自己表現などの問題をめぐって Radcliffe と比較するのに最も都合がよいと思われるからである。*Northanger Abbey* に関しては、それが *Udolpho* をすっぽりと取り込んだ構造である限り考慮に入れざるを得ないが言及は最小限に限ることにする。また *Sense and Sensibility* も視野に入れるべきだろうが、中心となるヒロインが姉妹2人に描き分けられているため、今回は言及しない。

◇1◇

最初に、女性の結婚問題はそれぞれの作品でどんな共通の設定を持ち、女性の 'propriety' とどのように関わって展開するだろうか。

まず、*Udolpho*、*The Italian*、*Persuasion*、どの作品においても、平穏に暮らす独身のヒロインの身の上が恋愛や財産の問題で不安定になって物語が始まり、ヒロインは不幸な思いをしたり恐怖にさらされたりするが、結局結婚と財産の問題がハッピーエンドに片づくことによって物語が閉じられる。*Udolpho* では、La Vallée という理想郷で暮らす Emily St.Aubert は、Valancourt と恋仲になるのと平行して、父 St.Aubert の破産と死により La Vallée を出ることを余儀なくされる。そして叔母とその夫 Montoni から不相応な相手だとされて Valancourt と会うことを禁止され、他の結婚相手 Morano を選ばれ、財産を追求する Montoni の思惑により Udolpho 城に幽閉され、恐怖の体験が始まる。*The Italian* では、孤児の Ellena di Rosalba と恋に落ちた Vincentio di Vivaldi は、身分の不釣合のため、結婚して名誉をけがせば嫡子の権利を与えない旨を父から告げられる。これと平行して Vivaldi の身辺には、謎の修道僧が Ellena との交際に不吉な予言をする等の不思議な恐ろしい現象が起こり始め、また結婚を阻止しようとする Vivaldi 侯爵夫人とその告解僧 Schedoni の策略で Ellena は修道院に幽閉される。そこから2人で脱出した後も Vivaldi は異端審問にかけられ、Ellena は命を狙われる。*The Italian* ではヒロインだけでなく、その恋人である男性の Vivaldi も身の上が不安定になって恐怖にさらされる。では *Persuasion* においてはどうだろうか。Anne Elliot は美しいがやや若さを欠いた 27 才で、まだ結婚相手が見つからない。折しも家計の苦しい Elliot 家が自宅 Kellynch 邸を貸しに出すと、その借り手の Croft 夫人の兄弟が、Anne がかつて恋をしたのに結婚を諦めねばならなかった Frederick Wentworth 氏であったという設定である。この結婚が破棄された理由は、Wentworth 氏に財産がなく、将来のあてもないからであった。Kellynch 邸の貸し借りが縁で Elliot 家と Wentworth 家のつきあいが始まり、*Udolpho* や *The Italian* とは違って超自然的な恐ろしい現象は起きないが、明るい社交世界の中、Anne は Wentworth 氏と同席したり2人きりになったりすると動揺するなど、心理的な不安定にさらされる。また Anne は妹 Mary の婚家の人々の面倒を見て気遣いも多く、あまり幸せではない ('...all that was happy and gay, all that was glowing and bright in prosperous love, all that was most unlike Anne Elliot!' *Persuasion*, p.138. [7])。

しかしこの3つの物語において全てはハッピーエンドにおさまり、カップルは結婚し、同時に財産問題も決着する。*Udolpho* で Emily は、La Vallée や叔母 Montoni 夫人の地所をめぐって、母方の叔父 Quesnel や Montoni と交渉するが、結局 La Vallée は彼女の元にもどり、Valancourt とそこで幸せに暮らす。貧しい孤児と思われていた *The Italian* の Ellena も、実は Bruno 伯爵の娘という高貴な身分であることが判明し、身分の不釣り合いは

解消されてめでたく Vivaldi と結婚する。*Persuasion* の Anne は Kellynch 邸の女主人にはならなかったが、地所は持たないが財産を十分作った Wentworth 氏と愛情を深めて結婚する。このように、3つの作品ではヒロインをめぐる結婚と財産の問題に関して設定と結論がよく似ており、当時の女性の結婚には経済的な規制が大きく働いたという同じ背景があることがうかがえる。

それではヒロインたちは身に降りかかる結婚と財産の問題にどのように対処しているだろうか。*Udolpho* の Emily は、Montoni に連れられてイタリアへ発つ前夜、庭に忍び込んだ Valancourt に求婚された時、動転し気絶しそうになりながらも肯定の返事をせず、次のように考えた。

> The conflict she had suffered, between love and duty she at present owed to her father's sister; her repugnance to a clandestine marriage, her fear of emerging on the world with embarrassments, such as might ultimately involve the object of her affection in misery and repentance; — all this various interest was too powerful for a mind, already enervated by sorrow, and her reason had suffered a transient suspension. But duty, and good sense, however hard the conflict, at length, triumphed over affection and mournful presentiment; above all, she dreaded to involve Valancourt in obscurity and vain regret, which she saw, or thought she saw, must be the too certain consequence of a marriage in their present circumstances; and she acted, perhaps, with somewhat more than female fortitude, when she resolved to endure a present, rather than provoke a distant misfortune. (*Udolpho*, p.155[8])

片や叔母への義務、つまり Valancourt と交際してはならないという叔母の (ひいては叔父 Montoni の)命令を聞くことと、片や恋人への愛との激しい板ばさみになり、理性も失いかけながらも、結局 Emily は 'good sense' を働かせ、義務を優先させた。彼女は秘密の結婚をして悔いることや世間に対して恥ずかしい思いをすることを恐れており、またこの結婚が不幸に終わって Valancourt を落胆させることを恐れたのだった。この倫理観は社交世界で生きていくための 'manners' を尊重するものであり、また次のような亡き父 St.Aubert の「'sensibility' よりも 'fortitude' を大事にせよ」という教えに従うものでもあった。

> 'I would not teach you to become insensible, if I could; I would only warn you of the evils of susceptibility, and point out how you may avoid them.... beware of priding yourself on the gracefulness of sensibility; if you yield to this vanity, your happiness is lost forever. Always remember how much more valuable is the strength of fortitude,...' (*Udolpho*, p.80)

常に 'sensibility' を持ち恐怖におののき気絶するような Emily がこのような教えを守ろうとしているのは意外かもしれない。しかし父 St.Aubert 自身ここでは 'sensibility' の行き過ぎに注意しているのであって 'sensibility' そのものを否定しているわけではない。また Poovey によれば、'sensibility' には「強い感情・感受性を持つ (feel strongly, sensitivity, responsiveness)」という aesthetic な面と「良心を持つ (capacity for *rational* feeling, benevolence, generosity)」という moral な面がある (Poovey, 'Ideology' p.312)。従って moral な面が強調される場合に 'fortitude' が重視され、過度な 'sensibility' に陥って感情の犠牲者になることがいましめられるという価値観も、Emily にとっては十分受け入れられるものなのである。実際 Emily は、La Vallée は売るしかないが Morano 伯と結婚すれば彼女の生計は立つことを Quesnel から告げられて新たな結婚と財産の問題が生じた時、この父の教えを思い出して心を強く持つことを決心している ('I do indeed perceive how much valuable is the strength of fortitude than the grace of sensibility, ...' p.214)。更に Emily は Udolpho 城を出て Villefort 伯爵の下に身を寄せている時に再び Valancourt から告白されるが、パリで堕落してしまった Valancourt に今後も会い続けることに伯爵が反対すると、この忠告を受け入れて Valancourt との結婚を諦める。

> His (=Count De Villefort's) repeated arguments could, indeed, alone have protected her from the affection she still felt for Valancourt, and she resolved to be governed by them. (*Udolpho*, p.519)

つまり Emily は、父 St.Aubert、叔父 Montoni、Villefort 伯爵 (亡き叔母 Villeroi 夫人の夫の従兄弟にあたる)という、いわば父・家長にあたる人物からの指示を決して自分から破ることなく、義務、理性、世間への体裁、そして 'good sense'、'fortitude'、'manners' を大事にし、そのために自分の恋愛感情の方を諦めて自己統制に努める 'proper lady' なのである。そして重要なのは、「Villefort 伯爵の言葉だけが Valancourt への愛情から彼女を守った」という言葉から明らかなように、この 'propriety' の価値を守ることが、Emily の身を守った (すなわち、堕落した

Valancourtと結婚することによって陥る不名誉と苦難から守られた)ととらえられていることである。Emilyは後にValancourtとの思い出に浸り、'fortitude'を尽くしたけれども自分は幸せにならなかったと嘆くが、それでも'fortitude'が自分を取り返しのつかないほどの不幸からは守ったということを知っている。

> ... she was compelled to acknowledge, that the fortitude she had formerly exerted, if it had not conducted her to happiness, had saved her from irretrievable misfortune — from Valancourt himself! (*Udolpho*, p.584)

ここには、'propriety'を守ることが自己抑制であると同時に自己の保存・確立につながるという、'propriety'の概念の抱え込んだパラドックスが明確に表れている。実際この後、Valancourtは賭博による借金で牢に入ったものの真に反省したということでVillefort伯爵から許されて、EmilyはValancourtと結婚できることになる。

いったん諦め、自己抑制をすることによって自らを守り、それが後に報われるという構造は*Persuasion*にも顕著である。財産のないWentworth氏との結婚をRussell夫人から諦めるように説得されたAnneは次のように考える。

> She was persuaded to believe the engagement a wrong thing — indiscreet, improper, hardly capable of success, and not deserving it. But it was not a merely selfish caution, under which she acted, in putting an end to it. Had she not imagined herself consulting his good, even more than her own, she could hardly have given him up. — The belief of being prudent, and self-denying principally for *his* advantage, was her chief consolation, under the misery of a parting. ... (*Persuasion*, p.56)

Anneの「無分別で不適切な、成功の見込みのない」結婚はやめようという決心は、社会で生きていくために分別を働かせて自己抑制をする'proper lady'のものである。しかも思慮を働かせることが相手のためになると信じたからこそ結婚を諦めたという姿勢は、世間に認めらない結婚をして相手を不幸にするのを恐れたEmilyの心理に通じるものがある。この後Anneは、LouisaがLymeでけがをした時に冷静に対処して大いに人々の役に立つが、それはPooveyによればAnneにself-commandがあることを示し、Wentworth氏に彼女が'fortitude'と'gentleness'を兼ね備えた女性であると分からせることになって、彼女が彼の愛を勝ち取ることにまでつながってゆく(Poovey, *The Proper Lady*, p.230)。

> Her character was now fixed on his mind as perfection itself, maintaining the loveliest medium of fortitude and gentleness;... he had learnt to distinguish between the steadiness of principle and the obstinacy of self-will, between the darings of heedlessness and the resolution of a collected mind. (*Persuasion*, p.244)

この過程は、*Udolpho*においてEmilyが、Villefort伯爵に従ってValancourtを諦めることで自分の'sensibility'をコントロールできることを示し、その結果Valancourtとの結婚という報いを受けることになる過程と(Poovey, 'Ideology', p.327)同じである。つまりEmilyもAnneも、自分の願望を捨て、自己制御ができることを示すことによって結果的に結婚相手を得て幸せになるという、自己抑制がそのまま自己実現になる構造が共通しているのである。Emilyの守ろうとする「'sensibility'よりも'fortitude'の方が大事」という倫理観は、もともとAustenの「'sensibility'よりも'sense'の方が大事」という倫理観とそれほどかけ離れたものではないのである。

*The Italian*のEllenaもまた同様な倫理観を持つ'proper lady'としての側面を持っている。Ellenaは叔母Bianchiの下でVivaldiとの結婚に合意するが、そのことを後で後悔する。修道院に閉じこめられ、尼僧院長から「あなたは自分自身と自分の義務を知るためにここに送られてきたので、高貴な家(=Vivaldi家)のために私はあなたをここで世話する」旨を告げられた彼女は、動揺がおさまると、Vivaldi家に認められないまま秘密に結婚しようとしたことを悔いて尼僧院長の正しさを認め、Vivaldiと別れることを考える(*The Italian*, p.69[9])。彼女はまた、彼女を捜しにきたVivaldiと共に修道院を脱出することを考えるが、'propriety'を重視する性格の彼女にはそれは本来できないことであった。

> It was true that Vivaldi had discovered her prison, but, if it were possible, that he could release her, she must consent to quit it with him; a step from which a mind so tremblingly jealous of propriety as hers, recoiled with alarm, though it would deliver her from captivity. (*The Italian*, p.122)

しかしEllenaは結局Vivaldiを諦められずに2人で修道院を抜け出し、再度のVivaldiの求婚を断りきれずに秘密

の結婚(の約束)をした(p.166,182-184)。'propriety'を守りきれなかったEllenaは、自己抑制をして結婚をきっぱり諦めたAnneと対照的であった。この点が片やGothic romance、片やrealism小説という対照性とも関連するように思われる。Anneが結末でWentworth氏との結婚を決意した時、最初に結婚を諦めた当時を振り返って次のように述べているのは興味深い。

> 'If I was wrong in yielding to persuasion once, remember that it was to persuasion exerted on the side of safety, not of risk. When I yielded, I thought it was to duty;...' (*Persuasion*, p.246)
>
> '...I must believe that I was right, much as I suffered from it, that I was perfectly right in being guided by the friend whom you will love better than you do now. To me, she was in the place of a parent....I am not saying that she did not err in her advice. It was, perhaps, one of those cases in which advice is good or bad only as the event decides; and for myself, I certainly never should, in any circumstance of tolerable similarity, give such advice. But I mean, that I was right in submitting to her, and that if I had done otherwise, I should have suffered more in continuing the engagement than I did even in giving it up, because I should have suffered in my conscience.... a strong sense of duty is no bad part of a woman's portion.' (*Persuasion*, p.248)

AnneはWentworth氏を諦めるよう説得したRussell夫人のことを正しいとも間違っていたとも言っていない。また少なくとも恨まなかったし、説得された自分のことも責めなかった('she did not blame Lady Russell, she did not blame herself for having been guided by her;' p.57-58)。ただ、当時の自分の取りえた態度は結婚を諦めることであり、それが危険でなく安全を選ぶことであり、義務に従うことであったから正しかった、婚約を続けていれば良心の呵責にさいなまれていただろうと結論づけている。このAnne自身のコメントは、Radcliffeと*Persuasion*のそれぞれのカップルの共通性と対照性の両方を明示している。つまり、どのヒロインも'proper lady'として義務を優先して自己抑制し結婚を諦めるべきという倫理観は共通して持っていた。しかしAnneは結婚を諦めてその倫理観を実践することにより、良心の呵責にさいなまれることなく安全を得た。Anneはつらい思いはしたが('not with a few months ended Anne's share of suffering from it. Her attachment and regerets had, for a long time, clouded every enjoyment of youth; and an early loss of bloom and spirits had been their lasting effect.' p.57)、EllenaやEmilyに比べれば社会的にも心理的にもはるかに安全で安定した身分であった。財産のない男と結婚して不幸になることを免れ、また結婚できない男への恋心を持つことによって陥る心理的不安定(良心の呵責)、あるいはその恋心が世間に知れた時の体裁の悪さ(純潔を疑われる)を免れ、独身女性としての身分と精神を安全に保ったということである。一方Radcliffeの方は、Ellenaは秘密の結婚をし、EmilyはValancourtから求愛されるままになって長い間関係がはっきりせず、彼女たちはその社会的身分も内面も著しく不安定なままである。「婚約を続けていれば良心の呵責にさいなまれていただろう」というAnneの言葉は彼女たちのことを言っているようにさえ思われる。また*Persuasion*のMusgrove夫人とCroft夫人は「長い婚約は危険で愚か」であると言うが[10]、その旨はRadclifffeのヒロインたちに対してこそ忠告なされるべきだろう。そして後に論じるように、彼女たちが社会的にも心理的にも大変不安定な状態に置かれていることは、Gothic的恐怖に襲われることに大きく関連している。

ヒロインたちが'propriety'の価値を守ることには理性や分別を用いることが含まれているが、Radcliffeの作品において理性や分別が重視されるのは結婚と財産の問題に関してだけでなく、幽霊さわぎが起こった時もそうである。たとえば*Udolpho*でEmilyは幽霊さわぎの際、恐怖心を恥じて抑えようと努力している('she struggled to overcome the illusions of fear...' 'Emily, somewhat ashamed of her terrors,...' *Udolpho*, p.240, 536)。また理性を用いようとするのはヒロインたちだけではない。*The Italian*ではもともとVivaldiは迷信を軽蔑するだけの分別はあったとされている('His understanding was sufficiently clear and strong to teach him to detect many errors of opinion ... as well as to despise the common superstitions of his country,...' *The Italian*, p.58)。Vivaldiを異端審問にかけるはずだった審問所がSchedoniの過去の罪を告発して真実を明るみに出す場所になってゆくのもまた合理的精神の表れである[11]。しかし、このようにヒロインたちの'propriety'の価値や義務に対する倫理観が共通しており、またRadcliffeの作品でも合理的精神が重視されているという類似性が認められる一方で、それでも片方はGothic romance、もう片方は'manners'の世界で展開されるrealism小説というジャンルの対照性は存在する。次章ではGothicがGothicたる由縁を指摘し、Radcliffeの作品における'sensibility'

の概念について考察しながら、各作品において理性・分別に対抗する感情・情熱がどのように処理されているかを比較することにする。

◇2◇

Northanger Abbey で Gothic かぶれした Catherine は、Henry Tilney の父 Tilney 将軍を *Udolpho* の Montoni のようだと思い、妻を殺したのではないか、もしくは幽閉しているのではないかと疑う。彼女は秘密の gallery とおぼしき所を探索しようとするが、Henry に見つかって「母は病気で急死したが、兄と私が看取り、父も可能な限り母を愛していた」とたしなめられ、自分の愚かな勘違いを反省し、'good sense' を身につけて立ち直ってゆく。彼女の反省の内容を要約すると、「アルプスやピレネーの山脈、イタリア、スイス、南仏なら悪漢や恐怖も似つかわしいが、法と 'manners' で守られた現在のイギリスでは殺人は許されず、愛されない妻なども安全で、人々の性格は善と悪の入り混じった 'mixed characcter' となっている」というものであるが[12]、これは Gothic romance と realism 小説の違いを正確に言い当てていると言える。Radcliffe の場合、たとえばたとえ St.Aubert 家の人々の内実が 18 世紀のイギリスのブルジョワのプロテスタントの倫理観を反映するものであったとしても[13]、物語に超自然や Gothic 的恐怖が介在してくるためには、彼らが 16 世紀のフランス貴族でカトリックでの設定である必要があった。現実離れしたことが起こるためには場面が日常を離れた遠方の地である必要があるからであり、これは romance の定義でもある。これに対して Austen の場合は *Northanger Abbey* も *Persuasion* も舞台はイギリスで、法律や 'manners' で守られた合理社会で地主階級の社交世界の日常が描かれる。

Catherine の考えでもう 1 つ重要な点は 'mixed character' への言及で、これは Radcliffe の作品が Gothic romance である理由の根幹に関わる問題である。一般に romance では定まった行動パターンを持つ典型的人格が、novel では realistic で多様な人物が描かれるとされる。Radcliffe の作品の登場人物たちが Catherine が言うほど 'mixed character' ではないのかどうかには問題があるが[14]、それでもたとえば家父長の人格に注目すれば、Gothic と realism の違いが示されるように思われる。*Udolpho* で Montoni は Montoni 夫人を幽閉し、利己的な目的で Emily の縁組みを決め、その相手 Morano の財産が少ないとわかると Morano を避けるために黙って Emily を Udolpho 城に連れ去るなど、暴君的家長として猛威をふるった。(情愛ある家長は父 St.Aubert として別個に、かつ典型的に描かれる。)一方 Austen の作品の家長は概してそこまで権力をふるわない。たとえば *Mansfield Park* の Sir Thomas Price は Fanny にとってしかつめらしく恐ろしい存在で、身分のいい Henry Crawford との結婚を Fanny とその家族にとって利益になるよい結婚だとして Fanny を説得しようとするが、経済結婚として Fanny に黙って決めて押しつけるわけではない。*Persuasion* では、人の階級や財産や外見にこだわる Sir Walter Elliot は Anne が 19 才の時、身分も財産も十分とは言えない海軍士官の Wentworth 氏と娘が結婚することを不名誉と考えて冷淡な態度をとったが、一財産できた Wentworth 氏と Anne の結婚が再び決まった時には特には反対しない。何より Anne の結婚に最も重要な助言をしているのは、もはや道徳的に機能していない家長の彼ではなく、年上の友人で親代りの Russell 夫人であり、家長ではない Russell 夫人には Anne は服従する必要はない[15]。よって従うべき権威が弱い分、Anne は権威と自分の願望の板ばさみになる負担が軽減され、Radcliffe のヒロインよりは心理的に追いつめられずにすんでいるように思われる。*Northanger Abbey* の Tilney 将軍でさえ、経済的に有利な結婚を息子に強要し、Catherine が想像するように必ずしも amiable な人物でもないが、妻を殺したり幽閉したりするような Gothic の極悪人ではない[16]。Radcliffe と Austen の家長のどちらがより典型的暴君的家長であるかは明らかである。

家長以外の人物に注目しても、結局 Austen の作品には欠点のある人物はいるが、誰も殺人の罪を犯すような極悪人ではない。(*Persuasion* では Sir Walter Elliot が虚栄の人物で、また彼の財産を相続することになっている William Elliot 氏が、財産目的のために裕福な女性と結婚して Kellynch 邸をおろそかにし、その妻をなくすと Kellynch 邸を入手するために Anne に言い寄ってくる小悪人で、Anne の妹 Mary や小姑 Louisa も欠点を持つ人物である。)それに対して Radcliffe の世界では姦通・殺人の罪が渦巻いている。しかもその罪には社会規範を越えた閉塞した血縁関係や情熱的恋愛といったものがからんでいる。

Gothic の大きな特徴、そして Austen との決定的な違いは、幽霊の出る城、迷路、不可解な物音、暗殺者といった Gothic の道具仕立てだけにあるのではない。その裏にある隠されたテーマ、裏の恐怖の根源としてしばしば挙げられる、「逃げ場のない恐怖」('anxiety without escape', Mario Praz による)、親子間 (祖先と子孫) の争い、血縁関係の閉塞 (近親相姦の恐怖) 等が Gothic の本当の

恐怖なのである。J.Wiltは Gothicの恐怖の根本にあるのは親子間で放たれる demon energyであり、それは財産(相続)・名誉・宗教の問題よりも大きいとし、*The Castle of Otranto*における Manfredの娘殺し等を挙げている (Wilt, p.11 - 12)。そして Radcliffeの作品も、血縁関係の閉塞、祖先(親の代)の罪の影響などの Gothicの裏の恐怖の要素を持っている。では Austenの作品はどうだろうか。たとえば J. Wiltのように、Gothicから受け継いだ恐怖の感情として、ヒロインが 'anxieties of commmon life' におびやかされる点、「田舎の 2~3の家庭」の交際の域を出ない環境が閉所恐怖症的である点などに留意し (Wilt, p.126 - 127)、Gothicの遺産としての Austenの作品の多様な面を明らかにしようと試みる人もいる。しかし Austenの作品では誰も(ヒロインの親の代の人々も)殺人や近親相姦の罪を犯さないという意味で血縁関係の閉塞はなく、従って Radcliffeと同じ意味での Gothicの裏の恐怖はないと言えるだろう。*Northanger Abbey* で Catherineが Montoniのような恐ろしい家長と考える Tilney将軍も Catherineにとっては恋人の父親であるにすぎない。

さて、Radcliffeの作品における血縁関係の閉塞、祖先(親の代)の罪の影響といった Gothicの裏の恐怖とはどんなものだろうか。またヒロインたちは、自分自身は何の罪も犯さないのに、Gothicの裏の恐怖とどう関わり、なぜ Gothic的超自然や恐怖にさらされることになるのだろうか。この点について、ヒロインたちの持つ 'sensibility'・'susceptibility' や感情・情熱の扱われ方も考慮に入れて考察していくことにする。

まず *Udolpho* において、暴君的家長 Montoniは Emilyの叔父(叔母 Cheronの配偶者)であり、Emilyのもう 1人の叔母(父の姉妹)Villeroi侯爵夫人は、結婚前に愛する人がいたが彼女の父の命令で財産のために Villeroi侯爵と結婚し、恋愛結婚できなかった。Villeroi侯爵もまた結婚前から 'passion' の女性 Laurentiniと恋仲であり、結婚後は不倫の関係を続け、Laurentiniは侯爵に毒を盛らせて Villeroi夫人を殺して失踪した (p.523 - 528,655 - 662)。Udolpho城に幽霊が出ると言われるのはそもそもこの城の前領主 Laurentiniが 20年前に謎の失踪をしたと思われているからである。また Emilyは Le - Blanc城で Villeroi夫人の死の床を見に行って幽霊に出くわすが、その正体が実は城の宝を盗みに来た海賊であるのに迷信的恐怖に襲われてしまうのは、Villeroi夫人が不幸な死に方をしたことを女中から聞いていたことが大きく影響している (p.523 - 528,537)。そして重要なのは、Villeroi侯爵と 2人の女性の間の姦通と殺人の罪は結局、結婚をめぐる財産問題と恋愛感情がうまく折り合わなかった、つまり経済結婚が恋愛結婚を阻んだことの結果であり、Villeroi夫人と Laurentiniという祖先の代の 2人の女性の置かれた状況が Emily自身の境遇ともつながり得るということである。Radcliffeの作品では血縁関係の閉塞・祖先の代の罪といった Gothic的要素は、暴君的家長を媒介にしてヒロインの結婚・財産・恋愛の問題と密接にからんで展開するのである。Emilyは、経済結婚を余儀なくされた Villeroi夫人と顔だけでなく境遇も似て、愛する Valancourtとの結婚を禁止され、Morano伯から繰り返し求婚され、父親代わりの Montoniから Morano伯との経済結婚を強いられる (p.216)。そしてこの経済結婚を迫られる恐怖は、Udolpho城で夜中に突然 Morano伯が Emilyの部屋を訪れ、Emilyが大変恐ろしい思いをする事件に具現化する (p.261)。Emilyのさらされる Gothic的恐怖はこのような彼女の不安の「投射」されたものであることが多い。他にも例を挙げれば、黒布で隠された絵をはぐって腐敗した死体を見て Emilyは気絶するが、これが実は死後の姿を見せて悔恨させる目的のため蝋で作られた人体であるのに、Montoniに殺された Laurentiniのものものだと Emilyが思いこんでしまうのも (p.248, 662 - 663)、また叔母 Montoni夫人の死のイメジに取りつかれ、叔母が幽閉されているらしい部屋のカーテンをめくって血に染まった死体を見てしまうのも (p.323,329,348)、Laurentiniと Montoni夫人の境遇が Emilyの境遇と似ているからである。当時は Montoniが Laurentiniを殺して城を奪ったと疑われていたし、放蕩で全財産を使い果たした Montoniから Montoni夫人も財産を奪われそうになっていた (p.281,304 - 305)。Emily もまた Montoni から、Morano伯との経済結婚だけでなく、Emily が Montoni夫人から引き継ぐことになっている地所を Montoniに譲る書類にサインすることも強要されており、Laurentiniがそう思われていたのと同様に Montoni夫人も Emily も Montoniに殺されて財産を奪われる危険があったと言える。

しかし Emilyの感情と 'sensibility' の働き方に注目するにはやはり恋愛問題を中心に据えねばならない。Emilyは Le - Blanc城にやって来た時に Villeroi夫人に似ていると言われ (p.491)、気の狂った修道女 Agnesからも Emilyが Villeroi夫人の子で夫人は Gasconyの紳士を愛していた旨を告げられ (p.647)、Emilyはかつて父がある書類と(Villeroi夫人のものと思われる)ミニ肖像画を見て泣いていたこと (p.26,104) も思い出し、Villeroi夫人と父 St.Aubertの関係を疑うに至る (p.650)。おそらくこの時点で Emilyが感じたのは、父の姦通の罪と自分が不義の子

である不名誉、自分の財産には正当性がないという不安などだろう。しかしLaurentini(=Agnes)とVilleroi夫人の全ての過去が読者の前に明らかになると、父の姦通の罪の疑いは晴れるが、代わりにLaurentiniの姦通の罪やVilleroi夫人の結婚前の恋愛が判明する。この過程—Emilyも身内である父も姦通の罪は決して犯さないが、Emilyの恋愛がVilleroi夫人、Laurentiniの境遇と十分つながり得るということが判明するという過程—は注目されてよい。つまり、Emilyももし経済結婚が義務である時、許されないValancourtとの恋愛を強行すれば、Laurentiniと同様に姦通の罪を犯すか、あるいは少なくとも、Villeroi夫人の結婚前の恋愛のように女性の守るべき'propriety'を破ってしまう危険があった。しかしEmily自身は'sensibility'よりも'fortitude'を重視する努力によって純潔や'propriety'を失う危険をなんとか回避し、しかも自分の境遇がLaurentiniやVilleroi夫人につながり得ることに気づくことはなく、またEmilyの'sensibility'とLaurentiniの'passion'とは描きわけられている[17]。この構造はEmilyの恋愛感情の働き方に関連するものと考えられる。Udolpho城に幽閉されたEmilyはValancourtのことを切に想いながらも、いざ彼が同じ城に幽閉されているのではないかと思いあたると、彼に会うことを無意識のうちに恐れている。

> What so lately she had eagerly hoped she now believed she dreaded; — dreaded to know, that Valancourt was near her; and, while she was anxious to be relieved from her apprehension for his safety, she still was unconscios, that a hope of soon seeing him, struggled with the fear. (*Udolpho*, p.388)

つまりEmilyは自分のうちにある恋愛感情・情熱を恐れていて容認していないのである。そしてEmilyの心理がこのように働くのは、また語りにおいてLaurentiniの'passion'が容認されないのは、Pooveyの論を参考にすれば、感情を解放し情熱に身を委ねることは自己統制を失うことであり、sexual desireの放縦の中に女性を放り出しsocial powerとidentityを奪うからである(Poovey, 'Ideology', p.312, 321-322)。こうしてEmilyの情熱は外部に排除され、彼女の自我は分裂し、また物語の構造も分裂した。Emilyは理性とproprietyを重視する'proper lady'であると同時に、Valancourtのことを思い続ける多感な女性でもある。理性で迷信を打ち消すと同時に、'sublime'な恐怖(黒布の裏など)にすすんで興味を持ち、'romantic imagination' (p.329, 342)を働かせてMontoni夫人の死のイメジに取りつかれたり、またValancourtの消息がわからない時には'O Valancourt! ... I have murdered thee!'と言って感情に圧倒されたりする(p.622-623)。情熱を持つことの恐怖はLaurentiniの幽霊のうわさやVilleroi夫人の部屋に出没する幽霊に投射され、Emilyの情熱は風景に転移し、EmilyはValancourtを想って何度も風景をながめる。かくして*Udolpho*は風景描写の多いGothic作品となった[18]。そしてEmilyのことを心に'passion'を持っていると言うAgnes(=Laurentini)が半ば狂女でなくてはならないのと同様に(p.574)、Emilyの遭遇するUdolpho城での出来事は狂ったimaginationの見る夢や恐ろしい架空の物語でなくてはならない(p.296)。'sublime'な恐怖が精神を高揚させるものだとされて(P.248)幽霊などの超自然的現象が好んで語られると同時に、理性が信頼されて超自然の全ては合理的に解決されねばならない。そしてEmilyの'sensibility'はこの分裂した事象を全て受けいれる。それは前述した通り、当時の'sensibility'の概念がmoral/aesthetic な両面を持ち(Poovey, 'Ideology',p.312)、一方の極ではfortitudeやpropriety の方向に、もう一方の極では超自然や恐怖へのさらされやすさ(susceptibility)や自己統制を失わせる'passion'にまで開かれているからである。

*The Italian*は、祖先の犯した罪と血縁関係の閉塞、理性を圧倒する感情といった性質が*Udolpho*よりもはるかに明確に表れている作品である。EllenaはVivaldi夫人の告解僧Schedoniに命を狙われるが、Schedoniは実はEllenaの実の父Bruno伯爵の兄弟Marinella伯爵であり、つまりEllenaの叔父である。そしてSchedoniはBruno伯の妻Olivia(Ellenaの実母)を愛して拒絶され、Bruno伯に放蕩を理由に経済的援助を断られたのを恨んでBruno伯を殺し、Oliviaと無理やり結婚するが、Oliviaに愛人がいることに嫉妬してOliviaを刺したという、姦通と殺人にまみれた過去を持っている(p.225,339-341,360-361)。そしてVivaldiとの結婚を阻止するためEllenaを殺そうとしたSchedoniが、Ellenaの持っていたミニ肖像画が自分の肖像であったため、EllenaがOliviaとの間にできた自分の娘と思いこむ場面は(p.235-238)、(疑似)父娘の間の殺人と再会の(疑似)近親相姦のドラマである。更にSchedoniはEllenaが自分の娘と知ると、身分の高いVivaldi家との結婚は自分にも好都合と考えて、これまで反対してきたEllenaとVivaldiの結婚を今度は逆に密かに進めようとする(p.243)、つまり経済結婚を強要する家長となる。Ellenaの置かれた境遇も*Udolpho*のEmilyと同様に、

Vivaldiとの恋愛結婚を望みながらも、その結婚が身分の問題でVivaldi家の親から阻止されたり、にわかに再会した叔父に密かに画策されたりする、大変不安定な境遇であった。そしてEllenaはVivaldiと秘密の恋愛結婚を試み、社会規範とpropriety を破った人間となるが、この行為は、兄弟の妻を奪い取ったSchedoni、そしてやむなくSchedoniと結婚した後Ansaldo神父という愛人の疑われたOliviaとも、社会規範を破った恋愛という点でつながってゆく。EllenaとVivaldiが礼拝堂で挙式しようとする場面(p.183-186)が、雷鳴や恐ろしい物音が響き、得体の知れない人影が現れ、2人を異端審問所に呼び出す声がするという、Maturinの *Melmoth the Wanderer*におけるMelmothとImmaleeの挙式にも似た最もGothicらしい場面になるのは、決してこのことと無関係ではないだろう。

そして *The Italian* において *Udolpho* と違って特徴的なのは、Ellenaだけでなく男性のVivaldiも結婚をめぐって身の上が不安定になって 'sensibility' や 'susceptibility' を発揮する点である。Vivaldiは父から「結婚して名誉を汚せば嫡子の権利を与えない」旨を告げられ、またVivaldi家ではその家柄と財産にふさわしい女性の家からの結婚の申し込みも受けており(p.30,165)、これは *Udolpho* のEmilyの境遇の男性版である。Vivaldiはまた、Ellenaの住むAltieri邸への行き帰りに謎の修道僧とすれ違い、これをEllenaの恋敵と思ったり、Ellenaが死んだという不吉な予言ととらえたり、血のついた服を見たり、様々な不安や迷信的恐怖にさらされるが(p.13,41,76-79)、これは後にVivaldiの過度のimaginiationや 'susceptibility' を利用したSchedoniらの策略であったことが判明する(p.396-398)。この時 'susceptibility' を指摘されたVivaldiは赤面するが、これをVivaldiの女性化と見なすこともできる(Miles, p.171)。そして *Udolpho* でEmilyがUdolpho城の秘密、つまり 'passion' の女性Laurentiniの秘密を解いていくように、*The Italian* ではVivaldiが異端審問所で 'passion' の破戒僧Schedoniの秘密を解いてゆく[19]。しかしVivaldiにはEmilyとは違って 'passion' の言葉が用いられることもあり、彼は分別もあるが多感で情熱的な面も持つ人物として描かれている。

> He was awed by the circumstances which had attended the visitations of the monk, if monk it was;...and his imagination, thus elevated by wonder and painful curiosity, was prepared for something above the reach of common conjecture, and beyond the accomplishment of human agency. His understanding was sufficiently clear and strong to teach him to detect many errors of opinion, ... as well as to despise the common superstitions of his country, and, in the usual state of his mind, he probably would not have paused for a moment on the subject before him; but his passions were now interested and his fancy awakened, and, though he was unconscious of this propensity, he would, perhaps, have been somewhat disappointed, to have descended suddenlyfrom the region of fearful sublimity, to which he had soared — the world of terrible shadows — to the earth, on which he daily walked, and to an explanation simply natural. (*The Italian*, p.58)

Ellenaへの情熱のあまり、Vivaldiはすれ違った修道僧の不思議さと恐怖に平常の分別を失い、自分では気づかないうちにpassionとfancyを働かせたのだった。そして語り手の「ここで 'sublimity' の世界から日常世界に引き戻されたなら彼はがっかりしただろう」というコメントは、Radcliffeの世界に特徴的な理性と情熱の関係をよく示している。つまり、理性を圧倒する情熱・fancy・imaginationが人をsublimity・超自然・Gothic的恐怖に導き精神を高揚させるものとして肯定される一方で、それは自己統御を失わせるので、理性に信頼の置かれる語りも同居する、分裂した語りになっているのである。

一方 *Persuasion* には、Gothicの道具仕立ても血縁関係の閉塞というGothicの裏の恐怖もないが、Anneが経済結婚の可能性やWentworth氏への自分の感情について考える場面はある。その場合、感情・情熱と理性・自己統制の問題はどのように扱われているだろうか。AnneはRussell夫人から、Elliot氏と結婚すればKellynch邸の女主人Lady Elliotとなれるのでよい結婚だと助言される。この一種の経済結婚の助言に対してAnneは、自分の母と同じ境遇になり、貸しに出したKellynch邸が自分のものとなって帰ってきてずっと住めるのは魅力的だと考えるが、Elliot氏の性格と過去について納得できない点があり、この結婚を退ける。MontoniやMorano伯の脅威におびえるEmilyやSchedoniに密かにVivaldiとの結婚を阻止も画策もされるEllenaとは違って、Anneは家長やRussell夫人の圧迫を感じることはなく、経済結婚の意義を十分知った上で相手が個人として自分によい相手かどうかを吟味して判断を下す。この場面でAnneが人間らしい暖かい感情の発露を重視しており、それが実はもともとAnneにとってのWentworth氏の魅力だった点は注目すべきである。

Mr Elliot was rational, discreet, polished, — but he was not open. There was never any burst of feeling, any warmth of indignation or delight, at the evil or good of others. This, to Anne, was a decided imperfection.... She prized the frank, the open-hearted, the eager character beyond all others. Warmth and enthusiasm did captivate her still. (*Persuasion*, p.173)

Captain Wentworth had no fortune....But, he was confident that he should soon be rich; — full of life and ardour, he knew that he should soon have a ship,...Such confidence, powerful in its own warmth, and bewitching in the wit which often expressed it, must have been enough for Anne; (*Persuasion*, p.56)

Wentworth氏は fancyや過度の imaginationを働かせて迷信的恐怖にさらされるような 'sensibility'の人間ではないし、ここでの 'warmth' や 'enthusiasm' といった言葉も社会規範を越えて罪を犯してしまうような 'passion' とは異なるものである。しかし Anne が若い時に義務を守って Wentworth氏を諦めて自分の感情を抑制した後に、たとえ Russell夫人に無分別と判断されようとも、どれだけ彼の人間らしい感情に惹かれていたか、また感情を肯定したいと思っていたかは次の引用に明らかである。

How eloquent could Anne Elliot have been, — how eloquent, at least, were her wishes on the side of early warm attachment, and a cheerful confidence in futurity, against that over-anxious caution which seems to insult exertion and distrust Providence! — She had been forced into prudence in her youth, she learned romance as she grew older — the natural sequel of an unnatural beginning.(*Persuasion*, p.58)

The Italian で Ellena が恋愛感情の方を優先させてしまって後悔したのとちょうど対照的に、Anne はこのように分別を身につけてから romance を身につける過程をたどり、暖かい感情を肯定できるものなら肯定したい気持ちに傾いたのだった。

Persuasion にはまた、Anne 自身が愛情について語る場面がある。Harville氏と Anne が、男女それぞれの置かれた境遇や愛情の持ち方の違いについて語り合うその場面で、ここでは Anne の次の 2つの発言に注目したい。1つは「女性は家に閉じこもって感情のえじきになる 'We (=women) live at home, quiet, confined, and our feelings prey upon us.'(p.236)」というものである。Anne は一般論として述べているが、これは Anne がかつて Wentworth氏と別れた後にしばらく味わった感情でもある ('Her attachment and regrets had, for a long time, clouded every enjoyment of youth;...she had been too dependant on time alone; no aid had been given in change of place,...or in any novelty or enlargement of society.' p.57)。しかし、Radcliffe のヒロインたちが幽閉されて 'sensibility' という振幅の広い感情のえじきになったのに対して、Anne の感情は決して理性を押し流してしまうような感情ではなかった。Anne はまた Harville氏に「男は妻子のためにがんばり尽くす」旨を言われた時、男女を問わず暖かく誠実な感情を持つことを尊重すると言い、特に女性の愛情の特質について、想う相手が不在でも希望が去っても長く愛することだと答える。

'God forbid that I should undervalue the warm and faithful feelings of any of my fellow-creatures. I should deserve utter contempt if I dared to suppose that true attachment and constancy were known only by woman. ...All the privilege I claim for my own sex ... is that of loving longest, when existence or when hope is gone.'(*Persuasion*, p.238)

Anne の言う通り、彼女自身の愛情は婚約が絶望的に破棄されても結局消えなかったし、また *Udolpho* でも Valancourt がパリで堕落している間にも Emily が彼への愛情を捨て去ることはなかった。そして「女性の愛情は長く続く」というこの Anne の意見が、そばでそれを聞いている Wentworth氏への間接的な告白にもなり得て (彼女はその意見を言った後、胸がいっぱいになっていて言葉がしゃべれなかった。p.238)、別の手紙のみを書いているように見えていた Wentworth氏が Anne への告白の手紙を書いて持って来ることになるこの場面は、2人がお互いに 'propriety' と 'manners' を守り通しながら成就する愛の場面でもある。Anne にとって感情・愛情とは、理性と 'propriety' に裏打ちされた貴重な美徳であり、*Udolpho* の Emily が St. Aubert の教訓と Montoni の脅威のために、Valancourt を愛すると同時にその感情を恐れる ambivalence、いわば理性と感情の自己分裂に陥らざるを得なかったのに対して、Anne は Wentworth氏への感情を控えめに表現することはあっても、それを自分の中で恐れ否定することはない。そしてこのことはそれぞれの作品の次のような性質にも対応すると考えられる。

Udolpho の Emily の感情は、家父長 (ただし実父ではない) の威圧的な支配の下に情熱にもつながりかねない感

情としてEmilyから排除され、恐怖として投射され、風景や外界に転移して表現されることになった。よって外界の描写はほとんどの場合Emilyのながめる主観的なもの、詳細な心象風景の描写となる。あるいは、Emilyの感情は風景や物音を媒介にして増幅されるとも言えるだろう。たとえばEmilyはイタリアへ発つ日、Valancourtから「同じ夕暮れを見て心を通いあわそう」という手紙をもらい、道中のsublimeな景色に心うたれながらValancourtのことを思う。

With what emotions of sublimity, softened by tenderness, did she meet Valancourt in thought, at the customary hour of sun-set, when, wandering among the Alps, she watched the glorious orb sink amid their summits, his last tints die away on their snowy points, and a solemn obscurity steal over the scene! (*Udolpho,* p.163 - 164)

あるいはUdolpho城で遠くから故郷の歌が聞こえてきた時には、Emilyは故郷の風景や過去をふり返って感傷に浸り、Valancourtが幽閉されてその歌を歌っているのではないかと思う。

...their soft melody was accompanied by a voice so full of pathos, that it evidently sang not of imaginary sorrows. Its sweet and peculiar tones she thought she had somewhere heard before; ...It stole over her mind, amidst the anguish of her present suffering, like a celestial strain, soothing, and re-assuring her; — 'Pleasant as the gale of spring, that sighs on the hunter's ear, when he awaken from dreams of joy, and has heard the music of the spirits of the hill.'*

But her emotion can scarcely be imagined, when she heard sung, with the taste and simplicity of true feeling, one of the popular airs of her native province, to which she had so often listened with delight, when a child, and she had so often heard her father repeat! To this well-known song, never, till now, heard but in her native country, her heart melted, while the memory of past times returned. The pleasant, peaceful scenes of Gascony, the tenderness and goodness of her parents, the taste and simplicity of her former life — all rose to her fancy, and formed a picture, so sweet and glowing, so strikingly contrasted with the scenes, the characters and the dangers, which now surrounded her — that her mind could not bear to pause upon the retrospect, and shrunk at the acuteness of its own sufferings.

...she heard the measure change, and the succeeding air called her again to the window, for she immediately recollected it to be the same she had formerly heard in the fishing-house in Gascony....Surprise soon yielded to other emotions; a thought darted, like lightning, upon her mind, which discovered a train of hopes, that revived all her spirits. ...[she] listened, now doubting and then believing, softly exclaimed the name of Valancourt....Yes, it was possible, that Valancourt was near her...(*Udolpho*, p.386 - 387)

歌の描写には、soft、sweet、pleasant、pathos、sorrows、soothing、re-assuringといった感情に関わる語が多用され、その歌はEmilyの心に「しのびこみ」、それを聞く彼女の心は「溶け」、ついで彼女の故郷の情景と過去の生活が「絵」となってうかびあがる。ここではオシアンの訳詩とされる一節(*)も連想されている。Emilyが恐ろしい目にあっている場面の割には風流かもしれない。しかし*Udolpho*における感情は以上のように、音楽(聴覚)と風景(視覚)と詩行、及び人格と心理全てが境界をなくしてあいまいに混じりあうような表現となって発露されるのが通例である。

これに対して*Persuasion*における風景は、Anneの心と溶けあうような心象風景にはなりにくい。たとえば秋の気配を感じる散歩でAnneはその風情と詩行に浸ろうとするが、結局近くを歩いているWentworth氏とMusgrove姉妹たちの会話が気になってそれどころではない。

Anne's object was, not to be in the way of any body,... Her *pleasure* in the walk must arise from the exercise and the day, from the view of the last smiles of the year upon the tawny leaves and withered hedges, and from repeating to herself some few of the thousand poetical descriptions extant of autumn, that season of peculiar and inexhaustible influence on the mind of taste and tenderness, that season which has drawn from every poet, worthy of being read, some attempt at description, or some lines of feeling. She occupied her mind as much as possible in such like musings and quotations; but it was not possible, that when within reach of Captain Wentworth's conversation with either of the Miss Musgroves, she should not try to hear it;...

Anne could not immediately fall into a quotation again. The sweet scenes of autumn were for a while put by — unless some tender sonnet, fraught with the apt analogy of the declining year, with declining happiness, and the images

of youth and hope, and spring, all gone together, blessed her memory. (*Persuasion,* p.106 - 107)[20]

秋の風景描写を含むこの一節はAnneの人生のアナロジー的表現でありながら、結局Anneにとっては 'anxieties of common life' のリアリティの方が風景や詩行よりも優勢なのである。また美しいLymeの風景も次のように第三者の視点から語られる。

...the remarkable situation of the town, the principal street almost hurrying into the water, the walk to the Cobb, skirting round the pleasant little bay, which in the season is animated with bathing machines and company, the Cobb itself, its old wonders and new improvements, with the very beautiful line of cliffs stretching out to the east of the town, are what the stranger's eye will seek; and a very strange stranger it must be, who does not see charms in the immediate environs of Lyme, to make him wish to know it better.... (*Persuasion*, p.117)

社交場での音楽の描写も簡潔である。

The first act was over. Now she (=Anne) hoped for some beneficial change; and, after a period of nothing-saying amongst the party, some of them did decided on going in quest of tea....

...another hour of pleasure or of penance was to be set out, another hour of music was to give delight or the gapes, as real or affected taste for it prevailed. To Anne, it chiefly wore the prospect of an hour of agitation. She could not quit that room in peace without seeing Captain Wentworth once more, without the interchange of one friendly look. (*Persuasion*, p.197 - 198)

Anneは音楽を聞いてWentworth氏に想いをはせるのではなく、Wentworth氏その人に会いたいのである。Radcliffeの場合ヒロインの感情が恋人本人に向かわずに風景などに転移しているのに対して、*Persuasion*のAnneの感情は風景や音楽よりもWentworth氏本人に直接向かう傾向にある。

そして*Persuasion*では結婚における個人の感情が肯定されて物語が閉じられる。

When any two young people take it into their heads to marry, they are pretty sure by perseverance to carry their point, be they ever so poor, or ever so imprudent, or ever so little likely to be necessary to each other's ultimate comfort. This may be bad morality to conclude with, but I believe it to be truth; (*Persuasion*, p.250)

しかしここでこの結論は道徳的にはよくないと断わられている通り、*Persuasion*では理性や自己統制によって感情が 'manners' の世界での限度を越えないように守られていたからこそ、語り手もこのようなコメントが出せたのかもしれない。これは、理性を圧倒しうる感情の扱われたRadcliffeの作品で、語り手が「すれ違った修道僧を恋敵と勘違いしたVivaldiがEllenaに求婚することを決意したのは 'passion' が思慮に勝った結果の過ちであった」とコメントするのと対照的である。

...he concluded with believing the notice, of which he had been warned, to be that of a rival, and that the danger which menaced him, was from the poniard of jealousy. This belif discovered to him at once the extent of his passion, and of the imprudence, which had thus readily admitted it; yet so far was this new prudence from overcoming his error, that, stung with a torture more exquisite than he had ever known, he resolved, at every event, to declare his love, and sue for the hand of Ellena. Unhappy young man, he knew not the fatal error, into which passion was precipitating him!(*The Italian*, p.13)

しかしまたAnneがWentworth氏と結婚できたのは、Wentworth氏が海軍という不安定なあてのない世界において戦死することなく、昇進して財産まで作れたという幸運に依存していることも留意されるべきだろう。確かにRadcliffeの作品ではVivaldiもヒロインたちも恐怖に翻弄されて人格が成長するとは言えず、典型的人格の域を大きく出ることがないのに対して、*Persuasion*のAnneは日常的な多様なリアリティのある世界に生きて、思慮深く人の役に立ち、Wentworth氏への愛情を安全に甦らせてゆく賢さと情愛を兼ね備えた女性であり、またWentworth氏の海軍での昇進にも彼本人の努力があったにちがいない。努力の成果と未来を信じる美しさと強さは、Anneが願った通り彼女の幸せに結実したのである (cf. 'how eloquent... were her (=Anne's) wishes on the side of early warm attachment, and a cheerful confidence in futurity, against that over-anxious caution which seems to insult exertion and distrust Providence!' *Persuasion*, p.58)。しかしBenwick氏の不幸な例 — BenwickとFanny Harvilleは婚約

して Benwickの昇進と財産増加を待ったが、それが実現した時には Fanny は他界していた ―に照らせばやはり Anne と Wentworth氏は幸運であり、Gothicのヒロインたちが家長に威圧されて主体性を奪われていたことに比べれば *Persuasion* の結末のコメントは楽観的に響く。それともこのコメントにはもっと皮肉な響きも言外に感じとるべきなのだろうか。これまで、当時の女性の置かれた社会状況、及び作品の設定とヒロインの心理の動きに注目して Radcliffe と Austen の比較を試みたが、ヒロインのハッピーエンドが約束されているという意味では *Udolpho*、*The Italian*、*Persuasion*、いずれの作品もほぼ型通りの結末であった。このことは、Radcliffe も Austen も当時の社会において sensiblity や duty の基準が主観によって計られるようになったというイデオロギー内部の矛盾を不問に処したことと関係があるように思われるが、この点についての考察はまたの機会に譲る。Pooveyの言葉を用いてまとめれば、*Udolpho* と *The Italian* では sensibility の持つ power が、*Persuation* では統制された感情の持つ power がドラマ化されたのだった (Poovey, *The Proper Lady*, p.228,235 - 236. 'Ideology', p.328 - 330)。

注

(1) Jane Austen, *Northanger Abbey*. Penguin Classics, ed. and intro. by Marilyn Butler, 1995

(2) Joseph Wiesenfarth, *Gothic Manners and the Classic English Novel*.(The University of Wisconsin Press, 1988) p.3 - 6

(3) Robert Miles, *Ann Radcliffe: The Great Enchantress.* (Manchester University Press, 1995) 'Introduction'、及び *Udolpho* と *The Italian* についての 7、8章を参照。

(4) Lawrence Stone, *The Family, Sex and Marriage in England 1500 - 1800*.(Penguin Books, 1979) 第 7 章を参照。

(5) Mary Poovey, *The Proper Lady and the Woman Writer*.(The University of Chicago Press, 1984) 以下 *The Proper Lady* と略。1 章 'The Proper Lady' と最終章 'Conclusion'、Austen については 6、7章を参照。Poovey の言う女性の願望とは、自由恋愛 (結婚)、あるいは 'romantic love' への願望と考えてもよい。

(6) Mary Poovey, 'Ideology and *The Mysteries of Udolpho*' (1979). *Criticism, 21.* 以下 'Ideology' と略。

(7) Jane Austen, *Persuasion*. (Penguin Classics, 1985)

(8) Ann Radcliffe, *The Mysteries of Udolpho*.(World's Classics, Oxford University Press, 1980, reprinted in 1991)

(9) Ann Radcliffe, *The Italian*. (World's Classics, Oxford University Press, 1981, reprented in 1991)

(10) 'there is nothing I so abominate for young people as a long engagement. It is what I always protested against for my children. It is all very well, I used to say, for young people to be engaged, if there is a certainty of their being able to marry in six months, or even in twelve, but a long engagement!'

'Yes, dear ma'am,... or an uncertain engagement; an engagement which may be long. To begin without knowing that at such a time there will be the means of marrying, I hold to be very unsafe and unwise, and what, I think, all parents should prevent as far as they can.' (*Persuasion*, p.234 - 235)

(11) Victor Sage は、審問所での Vivaldi は一貫して 'good rational sceptic'、'good Protestant' として答えており、審問官も途中から公正さを発揮すると指摘し、この場面の内実を、ローマのカトリックの審問所はより公正な (イギリスのような) 法廷に移るととらえている。Victor Sage, *Horror Fiction in the Protestant Tradition* (MacMillan Press, 1988) p.151 - 156 参照。

(12) Charming as were all Mrs.Radcliffe's works, and charming even as were the works of all her imitators, it was not in them perhaps that human nature, at least in the midland counties of England, was to be looked for. Of the Alps and Pyrenees, with their pine forests and their vices, they might give a faithful delineation; and Italy, Switzerland, and the South of France, might be as fruitful in horrors as they were there represented....But in the central part of England there was surely some security for the existence even of a wife not beloved, in the laws of the land, and the manners of the age. Murder was not tolerated, servants were not slaves, and neither poison nor sleeping potions to be procured, like rhubarb, from every druggist. Among the Alps and Pyrenees, perhaps, there were no mixed characters. There, such as were not as spotless as an angel, might have the dispositions of a fiend. But in England it was not so; among the English, she (=Catherine) believed, in their hearts and habits, there was a general though unequal

mixture of good and bad. Upon this conviction, she would not be surprised if even in Henry and Eleanor Tilney, some slight imperfection might hereafter appear; and upon this conviction she need not fear to acknowledge some actual specks in the character of their father, who, though cleared from the grossly injurious suspicions which she must ever blush to have entertained, she did believe , upon serious consideration, to be not perfectly amiable. (*Northanger Abbey*, p.174)

(13) V.Sageは Gothic revivalの背景としてアイルランドのカトリック解放運動のイギリスへの脅威を指摘し、Emilyの語ることはルター派(プロテスタント)の考え方で、*Udolpho*にはカトリック的迷信とプロテスタント的合理性の対立があるとしている(Sage, *Ibid.*, 第2章参照)。また R.Mileは St.Aubert、Emily、Vivaldi、Ellena等の持つ価値観は18世紀のイギリスの中産階級の非国教会徒のものであり、非貴族的、反封建的、反家父長制的としている(Miles, *Ibid.*, 第7、8章参照)。

(14) たとえば*Udolpho*の Montoniは傭兵の指令官で略奪まがいの戦闘を繰り返し、逮捕されて裁判で危険人物とされて獄中死するが、彼は有罪と決定されたわけではなく('nothing being discovered to criminate Montoni,...' Udolpho, p.569)真の悪漢として描かれているとは言えないし、本来は善人だが1度堕落してしまう Valancourtも 'mixed character' である。また Napierは *The Italian*の Schedoniですら最後には悪漢性を失ってしまうとする。Elizabeth Napier, *The Failure of Gothic*. (Clarendon Press, Oxford, 1987) p.13, 34参照。

(15) 'Anne's decision to break off her engagement...have little to do with Sir Walter's paternal displeasure. On the contrary, it has everything to do with the advice, not the authority, of a trusted friend, Lady Russell, to whom Anne does not owe the comparable duty of obedience....For Anne, no hard conflict between duty and inclination is implied by defying or simply ignoring her father.' 'In Anne's case, an older woman friend, and no venerable father carried the day. Lady Russell stands not in place of a mother, but rather 'in the place of a parent', ...and the very need to replace a living but morally dysfunctional father itself points to a problem with the conservative model.' (Claudia L. Johnson, *Jane Austen: Women, Politics, and the Novel*. The University of Chicago Press, 1988. p.146, 155)

(16) J.Wiltは Austenの家長たちは、Montoniが Emilyに対してそうだったように、娘の結婚と幸せについて willfulで脅威的だとするが、私は以上のような意味ではやはり Gothicの家長像とは異なると考える。Judith Wilt, *Ghosts of the Gothic: Austen, Eliot, and Lawrence*. (Princeton University Press,1980) p.129参照。

(17) Emilyは Laurentini (=Agnes)よりもずっと穏やかな性格として描かれており、例えば Emilyが Laurentiniの肖像画を見る時、そこには Emily自身の特徴と言える 'pensive mildness' 、'sweetness' 、'sentiment' といったものはなく 'passion' が あるとされ、一方 Emilyの悲しみの感情は 'fierce and terrible passions' では なく 'silent anguish' であるとされる (*Udolphop*, p.278,329)。

(18) 'Ann Radcliffe's heroines externalize passion and refuse to recognize it as a part of themselves: it returns therefore in uncontrollably threatening form.... The virginal heroines of Gothic fiction cannot represent women's full experience; the fullness of that experience is not condensed in character, but it permeats the landscapes, solitudes, dreams, and threats.' (Gillian Beer, '"Our Unnatural No-Voice": The Heroic Epistle, Pope, and Women's Gothic', *Modern Essays on 18th-century Literature* ed. by Leopold Damrosch, Jr., (Oxford University Press, 1988). p.409)

(19) Schedoniは流れてきたレクイエムを聞いて泣く Vivaldi夫人を 'The slave of her passions, the dupe of her senses!'(p.178) と軽蔑するが、彼自身も Ansaldo神父に罪を告解した際に 'passion' の奴隷だったと告白し、その他の箇所でも 'passion' を持つ人物とされている (*The Italian*, p.339,364,365)。

(20) Emilyも引用箇所の一部では自分の境遇がつらくて回想にひたれないと考えたり、また他の箇所でも風景や詩が慰めにならないと考えたりする('...Emily sought to lose the sense of her own cares, in the visionary scenes of the poet; but she had again to lament the irresistible force of circumstances over the taste and powers of the mind;...The enthusiasm of genius, with all its pictured scenes, now appeared cold, and dim.' p.383)。これは自分の境遇が気になって風情に浸れない Anneと非常に近い状況だが、それでも Emilyは風情や詩行に浸ることの方が頻繁である。